

南方を志願し

北方の飛行場大隊勤務

高知県 大崎 良 男

私は大正十（一九二一）年、高知県高岡郡の葉山村に生まれ、満二十歳になって「徴兵検査」を受けたのは昭和十六年で、結果は甲種合格でした。その時すでに長兄は砲兵として香川県善通寺の連隊に服務中で、次兄も高知県朝倉の歩兵連隊で訓練中でした。

三男の私は、神戸市の川崎造船所に勤務、機関部の振動試験に従事中でした。従って二人の兄の入営出征にも立ち会えませんでした。それは航空母艦「瑞鶴」の試験運転が行われている大事な時だったからです。ちなみに当時の海軍工廠等で造られていた「武蔵」は戦闘艦で、別名不沈艦とも言われ、一号艦で私達の造船所で造られた「瑞鶴」は四号艦でした。当時艦船の大きさを示すトン数は、軍艦の多くは重量で示され貨

客船は質量で算出し、貨物船は積載する貨物の重量で表されていたと記憶しています。神戸市の造船所から呉の軍港へ行くのに瀬戸内海を航行するのは危険であると言われ、四国の沖合を通り、豊予海峡を経て呉の軍港に入った次第です。

その当時の国民生活は極めて貧しく、男女共々山村から都市の軍需工場、紡績工場等へ働きに出るのが通例で、私が就職した造船所にも三百人の募集に対し三千以上の者が全国から集まり、採用試験には一カ月もの日数がかかったことを記憶しています。

太平洋戦争、それは一体何が原因で起こったのか、終戦後既に半世紀を越す今日想定されることは、満州方面や南米・ベルー方面へと移民移住を推奨して国の安定を計らんとした政策、あるいは経済封鎖に基づく国の困窮も一因ではなかったか、等が考えられますが、いずれにしても日本にとっては歴史始まって以来最大の、そして最悪の事件となり、戦勝国に対し無条件降伏という悲惨な結果となりました。

一説によれば北海道はソ連に、本州は米国に、四国は英国に、そして九州は中国へと分轄され、日本という国を地球上から抹殺しては、との意向も出されたとも聞きましたが、多くの国土を失い経済的な損失はもとより、人的な損害においては軍人軍属をはじめ、国民の被った被害は如何ばかりか、全く世界に類例のない数に上ると存じます。

即ち、私達の青春時代には国民に課せられた三大義務の一つに、満二十歳の男性には徴兵検査があり、それに合格すれば兵役に服することが憲法で定められており、これに従って私も九州熊本第三航空教育隊に昭和十六年九月に入隊、「直協偵察機」の整備兵として教育を受けた次第です。

そのころ私の脳裏にあったのは「自分は何のためにこの世に生まれてきたのか、そして兵役に服する以上は死を覚悟せねばならない。生とは何ぞ」。また高等小学校の時に八波則吉先生の「人生の目的とはプラスアルファなり」と教わった事等でした。

いよいよ軍人としての教育が始められ、中隊長は渡辺中尉殿で、ほとんど歩兵に近いような基礎教育が主体で、専門的な飛行機の構造や機能などは僅かの指導教育でした。しかも教育期間も六カ月程度で、多くの仲間はず外へ転属して行きました。私も同期の者と同様に、南方へ転属を希望して小隊長の山本見習士官へこの事を申し上げましたが、「そのような勝手なことは相ならん」と一言のもとに帰されました。そして部隊本部の炊事当番や隊長室、将校室、事務室の当番を命ぜられ、その後は次期入隊の初年兵の指導に当たる事になりました。

中隊の幹部は中隊長の下に少尉、見習士官数人、准尉一人、下士官数人であったと思いますが、教育期間も短い関係か、その人たちとは別離以来ほとんど音信はありませんでした。

その頃には、太平洋の南方各地、また中国等の各地で日夜を通じて戦闘が繰り広げられていました。やがて希望したとおり転属の命令が出ましたが、希望とは正反対の北方で、秋田県の能代飛行隊でした。同行の

人員や道程等の記憶は無く、飛行場近くの能代川に大きな杉の丸太材が、後(いまだ)に組まれ流されていたのが今も印象に残っています。能代には、双発(発動機が機体の両側にある)の百式司令部偵察機が格納庫に、また飛行場に整然と並べられており、市嶋大尉を部隊長に第四百七十七部隊の編成が成されました。しかし飛行機の搭乗員は別の部隊で、何かの祝日に能代川鉄橋の下を双発の飛行機で「アッ」と見る間に飛び抜けた技能を呆然として見とれたことを覚えています。

この百式司令部偵察機は当時としては世界的にも速度はもとより、操縦技能としても優れていたように聞きましたが、ただ一点脚が弱く、時としては胴体着陸をすることがありました。

能代での部隊編成を終わり、次には北海道の丘珠(おかだま)飛行場へと移動し、ここでは双発の司令部偵察機の整備を若干教わり、対空監視や格納庫や飛行場の積雪の排除に大変な労力を要しました。ある日、格納庫が積雪のために倒壊したことがありますが、幸い飛行機は

出ており、その被害はありませんでしたが、雪の重量が如何ばかりか、除雪が如何に必要であるか痛感した次第です。

また札幌刑務所へ二人で用使いに出され、その帰りに吹雪となり、たちまち積雪五十センチとなって道路がどこにあるかも分からず、雪の中を前進また後進で、泳ぐような姿勢で数倍の時間を要し、やっと部隊に帰り着いたことがありますが、これがもし一人であったら当然凍死していたと思われれます。帰営した時は既に捜索隊が出される寸前であり、北国に住む者にとっては食生活と同様に寒さと雪害に対する心構えが大切であることを知りました。

そのうち我々の飛行場大隊は、南樺太の大谷飛行場への移動を命ぜられ、汽車と連絡船で新任地へ到着したのですが、春とは申せ樺太です、寒さのために滑走路にひび割れや陥没が見られ、これの修繕にあたりました。

平坦な土地でありながら農家で飼育する馬が熊の被害に遭う事件があり、近隣の猟師十人ほどで射殺した

ようで、体重が五百キログラム近くのヒグマだったと聞きました。

南樺太に住む日本人の心境たるや、北緯五十度を境界にソ連と接するため、恐々としてその日を過ごしていた様子は、到底内地に住む者には想像もつかない様子で、休日になると兵舎の門前に子供たちが来て外出する兵隊を我が家に迎えに来ます。その当時、最早配給制で不自由な生活をしているのに、菓子や手拭等を差し出して慰労に努めてくれるような状態でした。

この状況を見て我々は「身をていしても国やこの人たちを守らねば」と痛感した次第ですが、樺太は当時大事な石油資源を持ち、平坦な土地の大木からはバルブがとれ、またオホーツク海は世界屈指（三大漁場の一つ）の漁獲量を誇るという日本の大きな支えでした。

私が隊長小泉東三郎中尉の当番をするようになった原因は、南樺太の大谷飛行場に勤務していた時のある日曜日に、高橋某が外出し飲酒のうえ帰営時間に遅れ

ました。彼は嚴重注意のうえ営倉に入れられ、中隊長も部隊長から注意をされた由でした。その事件に基づき中隊では嗜好調査が行われ、酒の好きな者は呼び出され、その中に私も入っており、中隊長の宿営に呼ばれ、酒の試飲を受けたのがはじめで、しばらくの間中隊長の官舎当番を命ぜられました。用使いや清掃などをしましたが、中隊長が帰ると風呂に入り、その後は私も入浴させていただき、酒と共に夕食を共にされ、名刺に証明を書いてもらって帰営するのが日課のようになり、誠心誠意努めた次第です。

その後また私達は北海道へと移動しました。中国の訓えに「人間万事塞翁が馬」がありますが、中隊長当番を命ぜられていたときのある日、伏見宮殿下が視察に来られたときのことですが、札幌の飛行場は大雪と氷に閉ざされていました。当時この地にいた兵員は約二千人と聞きましたが、鍬やスコップなどほとんどが手作業で、飛行場から札幌の市街までを昼夜を問わず二日間かかって道路の除雪を行い、やっと車が通行できるようになりました。

当日の早朝、私は中隊長に呼ばれ、三、四人の兵と共にトラックで市街までの道路偵察を命ぜられたただちに出発したのです。往路は何等事無く市街に至り、反転して帰途につきましたが、何のはずみか除雪した雪の中に後輪が入って動かなくなり、早速近くの農家に行き二頭の馬を出して引っ張ってもらったのですが如何とも動かない。万策尽き部隊への連絡も出来ず、農家に入り事の成り行きを見守るうちに、早くも警察の車を先頭に宮様が御出でになり、部隊からのお迎えの車に移乗せられ、飛行場に向かわれました。これを見てもまずは一くつろぎしたものの、道路偵察の不甲斐なさを我ながら残念で責任を感じた次第でした。

その後、日毎に戦況は悪化、私達も札幌から帯広の飛行場へと移動しましたが、帯広の飛行場からただ一機の司令部偵察機でアリューシャン列島の西端のアツ島を高度差利用により、見事偵察写真撮影をして帰ってきたことも聞きましたが、ほかの二十七機は遙か南のフィリピンへと応援に行きました。しかし三カ

月後に帰ってきたのはわずか三機だけでした。その戦況は数倍の敵機には如何とも対抗すべくもなかったとの事ですが、戦隊長は幸い生還した三機の中に入って帰られました。

北海道へも米機の来襲は度を重なるようになり、飛行機は各地へ分散格納し、私は兵器係として農家の倉庫を借用して兵器の一部を保管してもらい、車で通いました。ある日、空襲警報と共に米機が到来しました。その農家の老婆が泣き叫ぶ孫二人を連れて、私のいた兵器庫に走り込んで来て、「兵隊さん、助けて！」の悲鳴です。何の自信も無かったのですが、「早く家の中に入れ、静かに」となだめて路上に木箱を出し、軽機関銃を据えて、もし接近したら私が撃つからと待っていたのです。米機は来ましたが、高度も高く何の攻撃もなく「ホッ！」としたこともありました。

この頃には兵隊も地下室に起居していましたが、ある晩本部へ呼ばれ、自転車で行く途中、数メートルにわたってメラメラと青白く、まるで木の葉が焚火の燃えるような光景に出会いました。この世に生まれて初

めてのことに驚き、急いで本部に、そして用件よりもこのことを知らせて数人の者を現地へ案内しましたが、それは電灯で見るに土そのものでした。さて、その青白い光は何であろうか、今もって不思議に思う次第です。

そしてついに終戦の日を迎えました。各地に分散した兵隊は本部集合の報にはせ参じました。机上のラジオは将校の軍刀で真つ二つに切り裂かれており、自動車隊の一将校から「いずれ武装解除となるだろうが、必ずいつの日にかまた、力を合わせて頑張ろう」との話しがあり、我々は落胆やる方ないまま二、三人の友人と「俺たちは武装解除を受けるより死を選ぶ」と申し合いました。

そこで、香川県出身の古老を訪ね、遠い山中の隠れ場所へと案内してもらうことを約束しました。早速三人で車と当面の食料や小銃実弾などの荷造りをして防空壕に入れ、いつでも出られるように準備を整えましたが、この心配は徒勞に終わりました。

歳月は人を待たずとやら、私もはや、人生の老境に入りましたが、かつて在任した樺太の地にありし日本人の方々の悲惨な最期の情報を風聞するとき、人生は誰しも運と不運はありましようが、筆舌につくし難い多くの犠牲者が眠っていることを忘れることは出来ません。

いつ出発するかも知れぬ汽車を乗りつぎ、四国の地へ無事渡ることが出来るまではと、一升（一・八リットル）足らずの米を食わずに、少量の乾パンと水で食を済ませ高松に渡り着きました。この白米を駅近くの家に行き「炊いて下さい」と頼みましたが、「薪が無いから」と断られました。しかし、「半分は差し上げます」と言ったら主人自ら「それはそれは気の毒だ」と炊いて、夫婦でお握りにしてくれました。

汽車の時間を見計らって、駅のホームでお握りを二人でお別れの意も含めて食べようとしたとき、どうして知ったか駅長さんらしい人がお茶と湯のみをお盆に載せ「ご苦労様でした」と言われたとき、四国の土を踏んだ喜びと温かい一言に思わず二人は泣きました。

汽車の中はどことも満員でしたが、高知駅で友人と別れ一人須崎駅に下車、駅から約十五キロの道を歩いて帰ったと記憶していますが、帰ってみれば比島で長兄は戦死、次兄も白衣姿で帰り須崎市の高陵病院に入院し、ほどなく他界しました。父母の心痛如何ばかりかと存じました。

「ローマは一日にしてならず」、現在の平和なそして豊かな日本での生活も、数知れぬ多くの兵隊や国民の生命と財産を失い、そして多くの苦難と努力の積み重ねの歴史の結果です。今ははや、昔のこととなりましたが、悲惨な過去を忘れることのないようお願い申し上げます。

特別攻撃隊体験

岐阜県 小崎良三

昭和二（一九二七）年八月、私は岐阜県高山市に生まれました。岐阜県立斐太中学校四年在学中の昭和十

八年十月、海軍甲種飛行予科練生として松山海軍航空隊へ入隊しました。

当時、昭和十六年十二月八日には太平洋戦争が勃発し、日本の連合艦隊はハワイを攻撃し大戦果を挙げたのですが、すぐ翌年の昭和十七年五月三十日からのミッドウェー海戦の苛酷な海戦では、日本の連合艦隊の主力を失い、最新鋭空母の「赤城」「加賀」などが撃沈されてしまいました。このハワイ奇襲で火蓋が切られた大戦も、とくにミッドウェー海戦後の多くの南太平洋の海戦では、米軍の質量の圧倒的力によって風雲急を告げていた時代でした。

この昭和十八年頃から、ミッドウェー海戦によって戦闘機、艦爆、艦攻などの優秀なパイロットは多く亡くなってしまい、海軍では飛行兵を急募し始めました。私もちょうど斐太中学の四年生頃でしたが、自身も軍需工場へ行ったか、あるいは開墾のお手伝いをしたり、何かお役に立つことは、と考えておりました。学業も半分くらいしか出来ない時でした。そんな中で、私は海軍の飛行兵になって頑張りたいという